平成30年度に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人帯広畜産大学

1　全体評価

帯広畜産大学の基本的な目標は、「日本の食料基地」として食料の生産から消費まで一貫した環境が揃う北海道十勝地域において、生命、食料、環境をテーマに「農学」「畜産科学」「獣医学」に関する教育研究を推進し、知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、「食を支え、くらしを守る」人材の育成を通じて地域及び国際社会に貢献することである。第３期中期目標期間においては、獣医学分野と農畜産学分野を融合した教育研究体制、国際通用力を持つ教育課程及び食の安全確保のための教育システムを保有する我が国唯一の国立農学系単科大学として、グローバル社会の要請に即した農学系人材を育成することを目標としている。

この目標の達成に向け、学長のリーダーシップの下、新大学院の各コースに共同研究推進員を配置し、地域連携推進センターの教育研究コーディネーターと協力して学生の共同研究等への参加を促進するなど、「法人の基本的な目標」に沿って計画的に取り組んでいることが認められる。

（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

第３期中期目標期間における「戦略性が高く意欲的な目標・計画」について、平成30年度は主に以下の取組を実施し、法人の機能強化に向けて積極的に取り組んでいる。

○　平成30年９月開催の第161回日本獣医学会学術集会において、国際認証取得に向けた取組状況を紹介するほか、４大学が作成した獣医学教育デジタルコンテンツの拡充、提供状況及び４大学連携事業の枠組みを越えた全大学連携によるデジタルコンテンツ拡充の必要性について周知している。教育コンテンツについては、スキルスラボにおいて内視鏡の設置、犬の子宮モデル、精巣モデルの設置などの自学自習用教材を追加配備したことにより、平成30年度のスキルスラボ利用学生数は平成29年度の525名に対して、1,089名と倍増している。（ユニット「日本の獣医学教育改革の推進」に関する取組）

○　食品安全マネジメント教育プログラムについて、「HACCPシステム構築演習」を新たに英語で開講している。これにより畜産衛生学専攻大学院博士前期課程修了者におけるHACCP専門家資格取得比率は75％となり、中期計画の「平成30年度までに同専攻の50％以上の学生に専門家資格又は内部監査員資格を付与する」を大幅に上回って達成している。（ユニット「食と動物の国際教育研究拠点形成の推進」に関する取組）

2 項目別評価

＜評価結果の概況＞

	特 筆	一定の注目事項	順 調	おおむね順調	遅れ	重大な改善事項
（１）業務運営の改善及び効率化			○			
（２）財務内容の改善			○			
（３）自己点検・評価及び情報提供			○			
（４）その他業務運営			○			

Ⅰ．業務運営・財務内容等の状況

（１）業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善　②教育研究組織の見直し　③事務等の効率化・合理化

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる
（理由）　年度計画の記載13事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

平成30年度の実績のうち、下記の事項について**注目**される。

○ 年俸制の全教員への適用
教員の業績評価システムの適切な運用及び評価結果の検証に加え、新年俸制に関する制度設計及び同制度への移行を促すことにより全教員が年俸制給与になることを決定している。これにより、平成31年度までに全教員の給与を年俸制に移行することとしていた中期計画を前倒しで達成している。

（２）財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加　②経費の抑制　③資産の運用管理の改善

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる
（理由）　年度計画の記載９事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

（３）自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実　②情報公開や情報発信等の推進

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

（理由）　年度計画の記載５事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

（４）その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等　②安全管理　③法令遵守等

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

（理由）　年度計画の記載９事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

Ⅱ．教育研究等の質の向上の状況

平成30年度の実績のうち、下記の事項について**注目**される。

○ 原虫病研究センターの取組・成果

未だ有効な治療法・予防法が発見されていない、牛の流産の原因となる家畜病原体寄生虫「ネオスポラ」の病原性因子が「NcGRA 7」であることを世界で初めて発見している。NcGRA 7 に対するワクチンの有効性は過去の研究で確認されており、今後の研究によりネオスポラ感染に対する制御方法の実用化の進展が期待される。

共同利用・共同研究拠点

○ 「マダニバイオバンク」プロジェクトの推進

原虫病研究センターでは、「マダニバイオバンク」プロジェクトを推進するため、「原虫病の制御戦略に関する国際シンポジウム」をタイで開催（国内外から30名の参加）したほか、マダニ（国内優占種）のゲノム及びトランスクリプトーム解析を行い、マダニのESTデータベースを構築し、マダニバイオバンクをさらに充実させている。